

〈図書紹介〉

小山聡子

『もののけの日本史 死霊、

幽霊、妖怪の1000年』

久 禮 旦 雄

本書は、令和二年（二〇二〇）十一月、中公新書の一冊として刊行された。著者は二松学舎大学教授で、すでに『護法童子信仰の研究』（自照社出版、平成十五年）、『親鸞の信仰と呪術 病氣治療と臨終行儀』（吉川弘文館、平成二十五年）、『浄土真宗とは何か』（中公新書、平成二十七年）、『往生際の日本史』（春秋社、令和元年）などの著書で、仏教における呪術と信仰についての研究を行っている。本書は、その成果をもとに、仏教の病氣治療（加持・祈祷・修法など）と関係の深い「モノノケ」について、通史的に論じたものである。

以下にその目次を示す。

まえがき

序章 畏怖の始まり

第1章 震撼する貴族たち——古代

第2章 いかに退治するか——中世

第3章 崇らない幽霊——中世

第4章 娯楽の対象へ——近世

第5章 西洋との出会い——近代

終章 モノノケ像の転換——現代

あとがき

主要参考文献

古文書・古記録の幽霊一覧

本書「まえがき」において、著者は「これまで、古代、中でも『源氏物語』のモノノケばかりが論じられてきており、その他の時代については見過ごされてきた。また、モノノケの歴史を扱ってい

るように見える書籍も、言葉を厳密に区別せず、「物気」あるいは「物の怪」と書かれていない、霊、妖怪、幽霊、怨霊、化物の類まで含めてモノノケとして捉えて論じてきた傾向がある」と批判し、「それでは、モノノケの本質を明らかにすることできない」と断じて、「本書では、史料に基づき、モノノケと幽霊、怨霊、妖怪を区別して述べる」としている。そして「モノノケの系譜を明らかにすることを通して……古代・中世の日本人がどのようにに死や死者に対する恐怖を超克しようとしてきたのか……いかにして死者と良好な関係を保とうとしたのか……各時代における日本人の心性について」迫りたい、とその問題意識を明らかにしている。

従来、国文学や民俗学を中心に、明確な概念規定をせずに現代の「妖怪」や人類学で用いられるシャーマンと直結させて「怪異」や「巫覡」、「妖怪」などの言葉が用いられてきた。これに対して、

史料から読み取れる内容を中心に、厳密に規定し、同時代社会の中に位置づける必要が歴史学を中心に、近年しばしば論じられている⁽¹⁾。本書も、その中で、「モノノケ」という言葉について、史料に即して考察してみようという試みである⁽²⁾。では、その著者の試みは成功したのであるうか。以下、本書の展開に従ってみていくこととしたい。

序章では、すでに述べたような問題意識に続いて、「モノノケ」という言葉の成立と語義、そして隣接した言葉として、中国の典籍にみえる「邪気」や日本において用いられた「怨霊」「妖怪」「幽霊」などの用例と、その意味、また「モノノケ」との違いが論じられている。

いわば概念の整理であるが、すでにその時点で「古代において、モノノケは正体がわからない死霊、もしくはその気配を指すことが多かった」「一〇世紀以降に畏怖されたモノノケは、死霊や鬼、天狗、狐などの、劣位の超自然的存在が発す

る気のことである」とされており、古代において、

モノノケは死霊のみなのか、より広範囲を指す言葉なのか、あるいは途中で意味が拡大したのかが不明瞭のように感じられた。また、隣接の諸概念を整理する中で、「天皇などの高位の人物の霊は他の霊を超越する広義の「カミ」と認識された」としているのも気になる。そこでの「カミ」とは史料において「神祇」と書かれるもののことなのか、それとも現在我々が考える「カミ」のことなのか明確ではない。少なくとも古代において、神と霊の間には明確な区別が存在していたことはすでに指摘がある。⁽³⁾ ならば著者が「モノノケ」について述べるのと同様、「カミ」についても、そう呼ばれていないものを「カミ」と呼ぶことは不適切ではないだろうか。

続いて第一章・第二章では、十世紀から十四世紀にかけて、主に貴族社会で行われた病氣治療の際に現れるモノノケを中心に議論が展開されてい

る。

第一章では、主に藤原道長の周辺について記された古記録を中心に、病氣や出産の際に現れるモノノケの記事が分析され、ヨリマシを用いてモノノケに対してその活動の理由を語らせ、加持・修法・読経、あるいは供養により対処されたことが述べられている。

また第二章では、モノノケの調伏に用いられた憑祈禱という形式が經典にみえる阿尾奢法にはじまり、密教修法の社会への浸透とともに、さまざまな要素を取り入れつつ変化していった様子が論じられている。これは従来著者が研究を重ねてきた内容であり、具体的な事例に基づき、歴史的な展開を知ることができる。

なお、第一章の最後では、「白描絵料紙墨書金光明經」にみえる絵画化されたモノノケについて言及しているが、これについては、小松茂美の紹介があり、それを踏まえて高橋昌明が「描かれた

モノノケ」として論じている。⁽⁴⁾ しかしいずれも文中・参考文献に言及はない。⁽⁵⁾

第三章では、のちにモノノケと混同される「幽霊」について古記録等の用例から、その中世における意味について考察している。著者によれば「幽霊」は、本来霊魂そのものを意味していたが、のちのその意味が拡大し、死者その人を指すように拡大し、その中には往生をしたことが確実視されていた人々（法然・藤原俊成）なども含まれていたという。その上で、能の「幽霊」については従来、世阿弥が能においてはじめて「幽霊」という言葉を用いたとされていたことを否定し、「幽霊」は古記録に用例を見出す事ができ、「目に見えるかたちにした」のが「世阿弥の独創性」であるとしている。しかし、古記録の用例については著者が論文を引用する南本有紀が既に指摘していることであり、なぜ著者がそこまで自らの独自性を主張するのか理解に苦しむ。⁽⁶⁾

第四章では近世において死者の霊魂が懐疑的に見られるようになり、モノノケの言葉の意味も拡散するとともに、娯楽の対象となり、幽霊・モノノケ・化物が同一視されていく様子が描かれ、さらに第五章では近代となり、西洋の知識との接触により怪談や迷信が否定されるようになる一方で、娯楽としては生き残り、文学や絵画などで新しい意味付けを与えられていく様子が描かれている。

全体的な流れとしては著者の描く歴史は首肯できるものであるが、個別の議論には違和感も残る。例えば第四章では平田篤胤の幽冥界研究について、『稻生物怪録』によって「物怪」の実在性を証明しようとする行為と、……かつての貴族社会で恐れられたモノノケを否定……行為は矛盾する」とするが、篤胤が目指したものが日本独自の精神性の発見だとするならば、死者や妖怪の世界についても、仏教的影響を取り除いた（彼の考え

るところの) 本質的なものが存在するはずだ、という論旨において、著者がいう二つの行為は矛盾なく理解できるはずである。それは『稲生物怪録』の「物怪」が従来の仏教的世界観での鬼などとは異なる姿をしていること、また篤胤の著書『勝五郎再生記聞』で臨死体験を語る勝五郎が「僧共が経をよめども何にもならず、すべて彼等は錢金をたぶらかし取らむとするわざのみにて、益なきもの」とする一方で「白髪を長く打垂れて黒き衣服着たる翁の……誘なはるるに従ひて、何處とも知らず段々に高き奇麗なる芝原に行きて遊びあり」と語り、死後の世界は存在するが仏教とは関係ないとして、ことからも明らかではないだろうか。⁽⁷⁾

終章では現代社会の多様化し、曖昧になったモノノケのイメージを、文学作品のほか漫画、映画、ゲームなどから概観している。これについて、評者は議論する力はないが、個別の作品それぞれを

もう少し注意深く論じるべきではなかったかと感じる。

例えば、水木しげる『鬼太郎夜話』「地獄の散歩道」「水神さまが町にやってきた」に登場する「物の怪」について「なんとも情けない」「禿げ頭に垂れ下がった口ヒゲが二本チョロリと生えており、憎めないオジサン顔」をしている「非常に魅力的なキャラクター」と、その造形に賛辞を送り、現代社会における「モノノケ」のイメージを的確に示したものとしている。⁽⁸⁾

しかし、ここで描かれる「物の怪」はその初登場時の前かがみの姿勢からも、近世の竹原春扇『絵本百物語 桃山人夜話』の「小豆あらい」をもとにしていることは明白であり、そこで評価されるのは、水木のもつイメージのセレクトの妙というべきものである。⁽⁹⁾ 水木はこの「小豆あらい」のイメージを気にいったらしく、その後、『週刊少年マガジン』連載の『悪魔くん』「なんじゃもんじゃ」

(昭和三十一年十二月二十五日号から翌年二月二十六日号まで掲載)では、「大むかし、天の岩戸にとじこめられていた妖怪たち」として、「油すまし」とともに「あずきあらい」そのものとして登場させている。そして彼らの仲間として、シュールレアリスムの絵画のように描写される半透明の、手が生えた魚のような姿で空中を浮遊する存在が「もののけ」といって、妖怪や悪魔にしか見えない、何千年も生きている奇怪な生物」として登場するがこれについて著者は触れていない。⁽¹⁰⁾また、『鬼太郎夜話』の「物の怪」は、話の進行とともに、頭頂部が登場時の丸い頭から卵型に変化していく。⁽¹¹⁾この卵型の頭頂部を持つ老人の造形は、のちに『週刊少年マガジン』連載の『ゲゲゲの鬼太郎』「こま妖怪」(昭和四十三年三月二十四日号掲載)に登場する「明治二十年に冬眠に入った」「八十年も寝ていて世の中のことがわからなかった」妖怪「あまめはぎ」に酷似しており、デ

ザインが転用されたものであろう。⁽¹²⁾つまり水木は著者が評価する「憎めないオジサン顔」のイメージを、必ずしも「物の怪」の名前に関わるものとして考えていなかったと思われる。この時期の水木しげる作品には、後世に彼自身が「妖怪」と称して同一のカテゴリーへとまとめていく多様な前代の文化を整理しつつある過程がうかがえ、この部分をより慎重に分析すれば、現代におけるモノケとその周辺のイメージをより明確に理解することが可能であったのではないだろうか。⁽¹³⁾

本書はタイトルと副題にあるように「もののけの日本史」を「死霊・幽霊・妖怪」も含めて「1000年」にわたり論じたものである。当然のことながら論じる内容は多く、範囲は広い。その意味では多くの関連史料と先行研究を整理しつつ、一書をものされた著者の労力には敬意を表したい。一方で評者が気付いただけでも、言及されるべき先行研究や関連史料について見落しが多いことは否定

できず、それ故に著者の独自性の説得力が低下していることは否めない。今後、同様の研究を行う者にとって本書はその意味でも、よき先例として活用されるであろう。

注

- (1) 大江篤『日本古代の神と霊』（臨川書店、平成十九年）、東アジア怪異学会編『怪異学の地平』（臨川書店、平成三十一年）。
- (2) 国文学からの同様の試みとして、森正人『古代心性表現の研究』（岩波書店、令和元年）がある。
- (3) 笠井昌昭『平安時代の思想』石田一良編『思想史Ⅰ』（山川出版社、平成十三年）など。
- (4) 小松茂美『「目なし経」下絵と『有明の別物語』』（小松茂美著作集20）（平成十年、旺文社、初出昭和三十四年・三十五年）、高橋昌明『描かれたモノノケ』同『定本 酒吞童子の誕生 もうひとつの日本文化』（岩波現代文庫、令和二年、初出平成四年）
- (5) なお、著書の論文『平安時代におけるモノノケの表象と治病』同編『前近代日本の病氣治療と呪術』（思文閣出版、令和二年）には小松論文についての言及のみある。
- (6) 南本有紀「能の幽霊・考」笠井昌昭編『文化史学の挑戦』（思文閣出版、平成十七年）。なお、第三章の内容についての著者の先行論文『幽霊ではなかった幽霊―古代・中世の実像』小山聡子・松本健太郎『幽霊の歴史文化学』（思文閣出版、2019）には南本論文についての引用・言及はない。
- (7) 平田篤胤・子安宣邦校注『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（岩波文庫、平成三年）。
- (8) この部分で著者は「水木しげるの」代表作『鬼太郎』は……漫画版『ゲゲゲの鬼太郎』のルーツとなる『幽霊一家 墓場鬼太郎』（昭和三五年（一九六〇）に貸本専門誌『好奇伝』に掲載）……（傍点引用者）とするが、正確には同年に「幽霊一家」とその続編「幽霊一家 墓場鬼太郎」が『好奇伝』一号・二号に掲載されたのである。『水木しげる漫画大全集022 貸本版墓場鬼太郎1』（講談社、平成二十六年）参照。
- (9) 京極夏彦『文庫版 妖怪の理 妖怪の檻』（角川文庫、平成二十二年、単行本は平成十七年）。
- (10) 『水木しげる漫画大全集048 悪魔くん』（講談社、平成二十五年）。
- (11) 『水木しげる漫画大全集023 貸本版墓場鬼太郎2』（講談社、平成三十年）、『水木しげ

る漫画大全集024 貸本版墓場鬼太郎3』（講談社、平成三十年）。

（12）『水木しげる漫画大全集031 ゲゲゲの鬼太郎3』（講談社、平成二十七年）。

（13）京極前掲書。

（中公新書）